

Hardy 小説に於ける明暗の対比¹⁾

Night and Darkness in Thomas Hardy's Novels

市 原 聡 子*

Satoko ICHIHARA

論文要旨

本論文は、Hardy 小説に於いて夜と闇の効果が巧みに用いられていることに着目し、六作品について分析を試みた。personify された Egdon, 古代 Druidism の神殿である Stonehenge や trilithon 等, 特殊な location を用い, それらに馴染む夜と闇を配した Hardy の巧みな setting は, 後の naturalists に大いに影響を与え, Freud, Jung の無意識に基づく心理学に近い立場をとった彼らに先鞭をつけたといえるだろう。Egdon の闇は人間の本能, 意識下の意識の象徴と解釈され得ると共に, 他の location でも, 夜と闇は無意識, 混沌, 無秩序, 異教性, 超自然, 怪奇, 恐怖, 等と結び付いている。夜と闇に対して, 朝と明るさは理性, 秩序, キリスト教主義, 現実, 等と結び付き, 夜の出来事の明確化に関わることもしばしばである。しかし闇が暗示する人間の心の闇をも取り去ることはない。目の前には茫漠とした'darkling plain'が依然として広がり, そこに微かな光—生の本能—が見えるのみである。

Hardy 小説には長編・短編を含めて, 夜及び暗闇と夜明けが効果的に用いられているものが幾つかある。その中の特定の作品については既に論文に取り上げたものもあるが, ここでは更に範囲を広げて, 夜及び暗闇と夜明けの効果を論じてみたい。取り上げる作品は *The Return of the Native*, *Tess of the d'Urbervilles*, 短編集 *A Changed Man and Other Stories* より *What the Shepherd Saw*, *Life's Little Ironies* より *A Tragedy of Two Ambitions*, *Wessex Tales* より *The Withered Arm*, *The Three Strangers* である。

初めに *The Return of the Native* であるが, Egdon という特異な setting により夜の闇の効果が一層高められている。personify された Egdon は, 夜と闇に馴染む巨大な生き物である。

The spot was, indeed, a near relation of night, and when night showed itself an apparent tendency to gravitate together could be perceived in its shades and the scene. The sombre stretch of rounds and hollows seemed to rise and meet the evening gloom in pure sympathy, the heath exhaling darkness as rapidly as the heavens precipitated it. And so the obscurity in the air and the obscurity in the land closed together in a black fraternization towards which each advanced half-way.²⁾

The place became full of a watchful intentness now; for when other things sank

* 弘前大学教育学部 英語・英文学科教室

Department of English Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

brooding to sleep the heath appeared slowly to awake and listen.³⁾

そして Egdon の darkness が染み込んでいるのが Eustacia である。

To see her hair was to fancy that a whole winter did not contain darkness enough to form its shadow: it closed over her forehead like night-fall extinguishing the western glow.⁴⁾

その眼は同じように黒く、肌は‘darker than Tamsin’⁵⁾である。Eustacia は正に a dark lady, ‘Queen of Night’なのであり、彼女が内心如何に反発しようとも、Egdon の黒と Eustacia の黒のイメージは重なり合う。両者のイメージの類似はまた別の面に於いても見られる。11月5日の夜に Egdon で焚かれる火は一見 Guy Fawkes に因むもののように見えるが、ここでは‘the lineal descendants from jumbled Druidical rites and Saxon ceremonies’⁶⁾として、また同時に ‘Promethean rebelliousness’⁷⁾として焚かれている。このような日に Egdon が人間性と完全に調和するということは、キリスト教以前の原始社会に馴染むと同時に、夜が長く寒さが増す季節の初めに火を焚くという人間の本能的な部分に馴染むといえよう。一方、Eustacia は‘the higher female deities’⁸⁾を想わせる姿をしており、‘Pagan eyes, full of nocturnal mysteries’⁹⁾を持っていると同時に、人々から魔女呼ばわりされている。このように両者の間には darkness の他に paganism, primitivism の面で共通性が見られるが、このことは何を意味するのだろうか。

ここで Egdon のもうひとつの顔を考えなければならない。

...,and it was found to be the hitherto unrecognized original of those wild regions of obscurity which are vaguely felt to be compassing us about in midnight dreams of flight and disaster, and are never thought of after the dream till revived by scenes like this.¹⁰⁾

この Egdon の顔こそ後の naturalist 達が landscape に託したもの—‘a mirror for man’s hidden instinctual life’¹¹⁾—なのであり、Freud の Id に通じるものである。即ち、Egdon が映し出しているものは、Eustacia の心の中の暗い見えざる部分、意識下の意識、Id、本能なのであり、彼女はそのことが認識できずに反発し続ける。¹²⁾ 故に Eustacia が Egdon の闇の中で死を迎えるという出来事は実に象徴的であるが、彼女と同様、本能のままに生きた Wildeve もまた Eustacia と共に Egdon の闇の中で死を迎えることは当然といえよう。両者は自己の本能或いは Id を制御できずに自滅したのであり、Egdon は Eustacia の Id のみならず Wildeve の Id、更には人間の Id の象徴と考えられる。この点で、Clym だけが生き残ったのは妥当である。ところで本能に従う行動が全て反社会的行為や不道徳行為であるとは限らないのだが、この点から見ても、Eustacia と Wildeve は背反しており、Clym はそうではない。だからといって Hardy が poetic justice を忠実に守ったということではない。彼は偶然性を重視した作家であり、idealist でもなく、むしろ pessimist 的要素が強く、後の naturalist に通じる作家であった。偶然性は Mrs Yeobright に死をもたらし、Eustacia と Wildeve の死と同様、悲しみ、混乱、恐怖

の喚起に夜と闇が効果的に作用する。また闇の中で行われる Susan Nunsuch の蠟人形による呪いも、Eustacia の死と偶然の一致をみることで、Gothic 的な恐怖感、原始性、異教性、迷信、等をより強烈に印象づけるのである。

Tess of the d'Urbervilles の場合、夜と闇は plot を悲劇的結末へ押し流す動力、或いは動力の象徴として用いられることがしばしばである。Prince の死も闇と睡魔によるものであったが、なんといっても最初に強烈な印象をもたらすのは the Chase の闇である。ここで Alec の本能・欲望は完全に抑制を失い、無秩序・混乱がもたらされる。Alec の場合はこのような形で本能がむきだしになるのに対し、Angel の場合は夢遊病によって意識下の意識—これこそ Id と呼べるものだが—が露呈するのが夜である。そして Tess の場合、町の縁日からの帰り道、Alec の家の奉公人達との諍いを避けようとして Alec の馬に乗ってしまうという衝動性を示すのが夜である。そしてその結果生まれた不義の子の死に臨んで、真夜中に自ら洗礼を施すのだが、真夜中は正に「妄想が理性から脱け出す」時なのである。

In her misery she rocked herself upon the bed. The clock struck the solemn hour of one, that hour when fancy stalks outside reason, and malignant possibilities stand rock-firm as facts.¹³⁾

衝動と本能の結実である子供に、聖職者でもない母親が衝動的に洗礼を施した。しかも Tess の異教性については作中しばしば暗示されており、Sorrow がキリスト教徒の墓に入ることを拒否される結果と相俟って、彼女の衝動的な洗礼行為は皮肉的に扱われている。Desmond Hawkins 氏も指摘しているように、Flintcomb-Ash で Tess が Alec を革手袋で打った後で吐く言葉—‘Now, punish me!’....‘Whip me, crush me;....Once victim, always victim—that’s the law.’¹⁴⁾—を恋人に対する彼女の情熱の発露と見なすなら、この場面と呼応するのが、後に村を追われて家族と共に行き着いた Kingsbere の地下納骨堂で Alec と出会う場面であろう。この場合、暗がり地下納骨堂という setting は、Tess の意識下の意識の象徴であると同時に、彼女の精神の埋葬の象徴であり、結末の死をも暗示するものである。またそれは遠くキリスト教以前の昔から続く d'Urberville 家の因縁を暗示し、それに伴う原始性、異教、無秩序、不道德、そして没落を暗示している。

このような Tess の衝動的性質や異教的特性は、最後の Stonehenge の場面に集約されている。Angel と逃避行の末 Stonehenge に辿り着いた Tess は次の様に言う。

‘....And you used to say at Talbothays that I was a heathen. So now I am at home.’¹⁵⁾

この言葉の意味を考える時、‘a heathen’ と副題の ‘a pure woman’ との関係が見えてくる。Angel は impure であるとは知らずに Tess を ‘What a fresh and virginal daughter of Nature that milkmaid is!’¹⁶⁾ と評価したが、彼はこの時 Nature を Wordsworth 的な自然観で捉えている。しかし、一般に Vaughan から続くとされている Wordsworth の neo-platonism は Tess にとって虚偽である。彼女にとって Sorrow は「恥知らずな自然の私生の賜物」であった。

So passed away Sorrow the Undesired—that intrusive creature, that bastard gift of

shamless Nature who respects not the social law;....¹⁷⁾

Nature は衝動、欲望、本能、無意識とつながるもので、理想や神の恩寵などと関連するものではない。この事実は後々までも変わらず、むしろ様々な経験によって実証され、ついに赤貧のどん底で暗闇を見つめながら、彼女は次のような決心に至る一即ち、教会の日曜学校で教える歌の文句にあるような Providence の存在が確信できない今となつては、自信が弟や妹達の Providence になるしかないのだと。この時引用される Wordsworth の詩行は、生身の Tess を受け入れるのを拒んだ Angel の Nature 観と呼応し、実に皮肉的效果を上げている。

Not in utter nakedness
But trailing clouds of glory do we come.¹⁸⁾

Angel の農民、農村、自然に対する観念は、それらの内側から見たものではなく、あくまでも彼らとは違う教養人として外側から見たものであった。それ故 Tess についても観念的理解に止まっている。

Upon her sensations the whole world depend to Tess; through her existence all her fellow-creatures existed, to her. The universe itself only came into being for Tess on the particular day in the particular year in which she was born.¹⁹⁾

このような事実の奥にある Tess の心性を、そして更にもっと奥深い部分にある情熱を Angel は読み取ることができず、またこの事実を現実に置き換えてみることもしない。しかしながらその自然観はブラジルでの労働によって変化する。‘...why he had not judged Tess constructively rather than biographically, by the will rather than the deed?’²⁰⁾と自問しつつ Tess を捜し出した Angel は、Tess の衝動性が Alec を殺害する程強いことを認めながらも、その情熱の激しさによって Tess を再び愛するのである。この時 Angel は Tess の Nature—即ち衝動、本能、非意志的要素、無意識—を受け入れたことになる。そして Nature（本能、或いは Id と言って良いかもしれないが）のままに生きたという意味で、Tess は ‘a pure woman’ と言えよう。原始から変化せず流れ続ける暗い Id に従って生きた Tess が、暗闇の中、古代文明の遺跡である Stonehenge の上に横たわる時、異教徒として故郷へ帰ったような気がするのには理に適っている。また、文明社会、キリスト教社会から徹底的に受け入れを拒まれた異教徒 Tess が行き着く場所はこしかなかったのだという気がする。

以上のように意識下の意識という点から見ると、Tess も Eustacia も本能のままに生きた女性として同一のレベルに納まってしまう。しかし二人の描かれ方が全く異なっていることは周知の通りである。つまり Eustacia も情熱の激しさという点では実に魅力的なのだが、Tess の魅力とは較べようもない。Tess は女性の持つあらゆる特性を備えている—美德も欠点も。それが故に生身の女性として迫ってくる。また、Tess が衝動に駆られる時は必ず setting に不可避性、必然性が組み込まれている。衝動や情熱は正に人間性の一部なのであって、Tess の中にそれらの存在を認めながらも Angel が彼女を愛するということは、観念論を捨て、人間としての生身の Tess を愛することである。Victoria 朝の形骸化したキリスト教を軽蔑した Angel が、

観念的尺度で Tess の人間性を計ったことを後悔するのは皮肉的である。このような Hardy 独特の皮肉は Tess に於いては頻繁に見られるが、それらを通して、また Tess を取り巻く様々な状況の描写を通して、作者の社会批判、宗教批判が行われている。中でも最大の皮肉は‘a pure woman’であることは明白だが、社会から拒絶され処刑に至るこの女性の情熱が最終的に Angel に認められるという事実は、‘the untameable, Ishmaelish thing’であり、‘a mirror for man’s hidden instinctual life’である Egdon が、やがて‘all of nature that is absolutely in keeping with the moods of the more thinking among mankind’²¹⁾となる事実と通じるものがある。即ち文明の発達と共になおざりにされるようになった、人間が原始から変わらずに持ち続けている Id にも似た生命力の源である本能や人間性を、再認識し復権させることの重要性が、これらの事実の中に示されていると考えられよう。

さて、ここまでは二つの長編について夜の効果を論じてきたが、次に短編での効果に言及する。本論の初めに題名を挙げたが、特に夜と闇の効果が高い作品を取り上げた。最初に *What the Shepherd Saw* であるが、この作品は夜と闇の効果を狙って書かれたものであることは明白である。また setting は舞台のごとくで、劇を意識したものであろう。全体で四つの場は‘night’で分割されている。これ程徹底した夜の暗がりの中で繰り広げられる事件は、何を象徴しているのだろうか？ 時は Christmastide で‘the early lambing season’と如何にも祝福された季節であるのに対し、場所は古代の異教徒の遺跡‘Druidical trilithon’—通称‘the Devil’s door’—の近くである。主人公が子羊のごとく無力な羊飼いの少年であるのに対し (lamb は Lamb of God 即ち Christ を連想させる)、Duke は異教の大神 Jove に喩えられる。これらの対比的構図に於いて、力の上で優位に立つのが異教を象徴する側である。Duke は権力によって少年の口を封じ

He took the boy across to the trilithon, and made him kneel down.

‘Now, this was once a holy place,’ resumed the Duke. ‘An altar stood here, erected to a venerable family of gods, who were known and talked of long before the God we know now. So that an oath sworn here is doubly an oath. Say this after me: “May all the host above—angels and archangels, and principalities and powers—punish me; may I be tormented wherever I am—in the house or in the garden, in the fields or in the roads, in church or in chapel, at home or abroad, on land or at sea; may I be afflicted in eating and in drinking, in growing up and in growing old, in living and dying, inwardly and outwardly, and for always, if I ever speak of my life as a shepherd boy, or of what I have seen done on this Marlbury Down. So be it, and so let it be. Amen and amen.” Now kiss the stone.’

The trembling boy repeated the words, and kissed the stone, as desired.²²⁾

Duke が少年に秘密を守ることを誓わせたのは、「キリスト教の神の名において」ではなく、異教の神殿‘the Devil’s door’に口づけることによってであった。ここではキリスト教世界とそれに伴う道徳・秩序は、小屋の中で息を潜める羊飼いの少年のごとくに縮こまり、無力であり、疑惑・嫉妬・憎しみの感情が蔓延り、衝動が行為となって表出する。原始の異教の遺跡に呼応するように、人間精神の暗い原始的なジャングルの原始的願望・衝動としての Id が表出するの

である。夜は四場にわたって明けることなく、混乱、無秩序、不道德は続くが、この闇は同時に Duke と Bill Mills の心の闇—不安、苛立ち、罪の意識—をも象徴している。Angel と同様、Duke もまた夢遊病によって罪の意識と罪状発覚への恐怖を露呈している。

さて動機こそ違うが、殺人を扱った短編として *A Tragedy of Two Ambitions* がある。二人の兄弟 Joshua と Cornelius は地位も財産もなく、大学進学を切望するが叶わないという点で、Christminster を憧れる Jude を想わせるが、彼らは Jude のように obscure ではない。彼らには Jude には見られない母親譲りの強い野心があったからである。そして結局その野心の故に父親を見殺しにするのであって、前述の Duke の場合とは動機が異なる。彼らの意志は「父親を助けよ」と命じ、実際救う時間はあったにも拘わらず、彼らの中の何かが救助行為を妨げる。

Still they did not move, but waited, holding each other, each thinking the same thought. Weights of lead seemed to be affixed to their feet, which would no longer obey their wills.²³⁾

この場合‘Weights of lead’は、やはり二人の衝動、或いは意識下の意識を表すものと解釈すべきであろう。勿論、彼らの立場を弁護する様々な条件が並べられてはいる。貧しさと階級の低さという厳しい環境を、野心によって克服して聖職に就き、妹も玉の輿に乗ろうという矢先に、地墮落で恥知らずな父親がやって来て今まさに三人の幸福を壊そうとする時、Joshua と Cornelius の行為は当然といえるのかもしれない。しかしその行為を当然と見なす Guerard 氏の誤りを Brady 女史は指摘している。

But the argument in his most convincing one, and has led Albert J. Guerard to call the deed ‘a very plausible crime.’ A crime, nevertheless, it is. Hardy told Edmund Gosse in 1888 that the story was about ‘a cold blooded murder,’ and in order to emphasize the culpability of the two brothers added this sentence in 1912: ‘In their pause there had been time to save him twice over.’²⁴⁾

Hardy は二人の兄弟を取り巻く環境を彼らの犯した罪の重さを軽減するために設定したのではない。むしろ皮肉を増すためにそれらを用いたのだと考えられるが、それは V の Joshua の言葉によって強められる。

‘...I, too, with my petty living—what am I after all? ...To tell the truth, the Church is a poor forlorn hope for people without influence, particularly when their enthusiasm begins to flag. A social regenerator has a better chance outside, where he is unhampered by dogma and tradition. As for me, I would rather have gone on mending mills, with my crust of bread and liberty.’²⁵⁾

Brady 女史は父親のステッキが「アロンのつえ」(Aaron’s rod that budded) を象徴していること、また Joshua という名の象徴性から強烈的な皮肉が生まれていると述べている。²⁶⁾ 即ち二人の兄弟は、如何に環境によって条件付けられようと、形式上の聖職者にすぎない。限られた領

域の中で、野心に憑かれて社会的地位と名誉を極めようとしたのであり、真の聖職者ではない。彼らの暗い衝動、憎しみや罪と関わるどろどろとした意識下の意識は、ここでもまた夜の闇によって象徴的に示されている。そして *What the Shepherd Saw* の場合と同様、時は Christmas-tide なのである。

Tess や *What the Shepherd Saw* で見られた Gothic 的色彩は *The Withered Arm* では強烈である。その強烈さはむしろ迷信によって引き起こされているが、それについて Brady 女史は次の様に述べている。

The superstitions in 'The Withered Arm' already existed both in the Dorset culture that Hardy knew and in more universal forms of folklore. ...and it is possible that Hardy derived the idea of the withered limb from Shakespeare's *Richard III*, who thinks he has been overlooked by his brother's wife and Jane Shore, his brother's former mistress:....²⁷⁾

Hardy は育った環境の中から様々な迷信を取り上げては、作品に利用した。それらはある時は Gothic 的恐怖感を煽り、ある時は不吉な予示となり、ある時は宿命観を助長し、またある時は個人の意識下の意識の象徴となるというように、要所要所で効果を生み、Hardy 小説独特の世界を築く上で不可欠な要素となっている。*The Withered Arm* は正に 'the withered arm' を核とした物語で、テーマそのものがタイトルになっていることから分かるように、筋は緊密で無駄がない。しかしそれだけに短編特有の欠点も認められる。Brady 女史も指摘するように、前半部では少年を完全に無視しておきながら、絞首刑の場面に Lodge 氏が居合わせるのは如何にも不自然である。Bayley 氏に至っては、他の作品と共にこの作品を 'there is a dead quality about them: they have all the faults of Hardy's fiction and few of the virtues'²⁸⁾ と呼んでいる程である。迷信はたとえ物語の核として用いられても action そのものであってはならない。supernatural なものによって action が支配されると、必然性が失われてしまう。Hardy は、そういう意味では極めて慎重に supernatural な要素を取り入れている。Rhoda Brook が夢の中で Gertrude Lodge の腕を掴んで床に叩きつけた時間と、息子が母親の部屋で大きな音がするのを聞いた時間と、Gertrude が夢を見ているうちに腕が痛みだした時間との正確な一致を明らかにすることを避けている。また Conjuror Trendle が Mrs Lodge に見せた tumbler の中の姿が Rhoda であったことは、客観的な形では示されていない。読者はただ Mrs Lodge の感覚を通して知るのみである。更に Trendle の指示した原始的療法が効を奏していたなら、supernatural なものがより現実的意義を持つものとなったであろうが、それすらも効果の程は分からず仕舞いである。血の流れが変わった一逆流した一時、物語りも逆転する一どんでん返しを見る一からである。

構成上の欠点はあるにせよ、この作品は *Tess* や *What the Shepherd Saw* でも触れた夢と Id の表出という点で意義深い。ここでは夢は単なる意識下の意識を示すだけでなく、夢と偶然の一致が重なることにより plot が出発するからである。時は真夜中の 2 時頃、どろどろとした精神の暗い部分が現れるのにふさわしい時刻、そして supernatural なものが力を発揮するように思える時刻。'witch' と呼ばれている Rhoda なら 'I exercise a malignant power over people against my own will'²⁹⁾ も有り得ると感じさせる。即ち人々を 'what sombre thoughts were

beating inside that impassive, wrinkled brow, to the rhythm of the alternating milk-streams³⁰⁾と訝らせるものこそ Rhoda の魔女性であって、精神の深い暗がり、心の闇が極端な形で取り入れられた作品といえよう。

最後に *The Three Strangers* を取り上げるが、これまで取り上げた作品とは趣を異にする。*What the Shepherd Saw* と同様、「語り (tale)」の形式で、そこに溢れる pastoralism は comical な要素と相俟って、この comedy を引き立て味のあるものになっている。時はただ一夜一厳密には 3 月 28 日午後 7 時から 12 時頃までの僅か 5 時間(その前後は付けたしにすぎない)、事件は一つ、場所も一所と compact である。陰湿、グロテスク、超自然といった要素は見られず、スピーディーな筋運び、素朴な人々の暖かな人間味とユーモア溢れる会話がある。Hardy の小説では兎角マイナスに作用しがちな偶然性も、ここではプラスに作用している。あたり一面暗闇の中、完全に周囲から離れた一軒家にやって来るのは、心の闇を持った人々である。sheep-stealer は罪こそ犯しているが、罪状に較べて重い刑に処せられようとしている。それは当時の人々にも不合理と思われるものであった。

But the intended punishment was cruelly disproportioned to the transgression, and the sympathy of a great many country-folk in that district was strongly on the side of the fugitive.³¹⁾

彼の心の闇は罪を犯したことではなく、捕らえられることへの恐怖と、処刑された後の自分の家族の行き先に対する不安であろう。というのは彼は家族が飢えて死にそうになっているので羊を盗んだのだが、白昼堂々と人が見ている前で盗んでいるからで、その態度は国政に対する不満と怒りを表しているからである。hangman は人を殺すことを商売としている故に、その心の奥は決して明るいものではないだろうし、ある者達にとっては‘the Prince of Darkness’なのである。そして第三の男は身内の者が処刑されることに深い悲しみを抱いてやって来る。彼らは皆、それぞれの心の暗さを代弁するような嵐の闇の中からこの一軒家にやって来るが、ここには洗礼の祝いに伴う陽気さ、明るさ、幸福感、秩序がある。それらは次第に損なわれ緊張感が募ってゆくが、家の中では秩序は保たれる。人々が飛び出した外の闇は正に混乱の世界であるが、夜は犯罪者に味方し、また感情的に処罰が重すぎると感じる追跡者達の手を緩めるのである。

以上、夜と闇の効果を中心に六作品について論じたが、暗さは明るさとの対比により、一層引き立つものとなっていて、両者の象徴的意味もまた対照的である。*The Return of the Native*, *Tess*, *What the Shepherd Saw* では、それぞれ闇の Egdon で Eustacia と Wildeve が溺死した後に；*Tess* が夜の Stonehenge で心の安らぎを得た後に；そして Duke が夢遊病者として意識下の意識を示した後に夜明けとなり、事件の結末が明らかにされる。Eustacia と Wildeve が死に、自分だけが生き残ったことを知って Clym は Venn に向かって‘But I am getting used to the horror of my existence. They say that a time comes when men laugh at misery through long acquaintance with it.’と述べ、更に次の様に述べる。

‘No, they are not desperate. They are only hopeless; and my great regret is that for what I have done no man or law can punish me!’³²⁾

ここで注目すべきは Clym を罰する‘law’がないことで、彼は重荷を背負って生きて行かなくてはならない。

‘...It is I who ought to have drowned myself. It would have been a charity to the living had the river overwhelmed me and borne her up. But I cannot die. Those who ought to have lived lie dead; and here am I alive!’³³⁾

死んだ二人は事実上法にふれる行為をしようとしていたのであり、夜の闇の中で死ぬことによって、夜明けは秩序と理性の象徴として訪れる。同様に殺人の罪を犯した Tess も夜明けと共に捕らえられ、‘Justice’が執行される。尤も、Aeschylean phrase を持ち出すことで、この‘Justice’は皮肉を含むことになるのだが、あくまでも機械的な意味で合法的処罰といえる。このような意味で、Stonehenge と夜が暗示する異教性、無秩序、犯罪、混乱は夜明けと共に消え、キリスト教に基づく法と理性と秩序の世界となる。Stonehenge と同様の heathen temple である trilithon が舞台の *What the Shepherd Saw* の場合も、構成上のながい夜—その長さは、殺人者と殺人の目撃者達が事件を告白せず心中に秘めている期間である—が明ける時が、全てが明白になり、良心、理性、秩序が戻るのである。

朝は *The Three Strangers* では緊張、恐怖、混乱からの解放として訪れるが、明暗の対比は夜の暗さと屋内の明るさにも見られる。しかし屋内の明るさ、暖かさが暗示する楽しい幸福な気分は次第に緊張感を増し、張り詰めた空気は危機感を孕むようになる。この対比は *A Tragedy of Two Ambitions* にも見られるものである。外の夜の暗がりとは背信、邪悪、不安、混乱に対し、Fellmer 館の中は明るく、誠実、幸福、歓喜、秩序がある。明るさの中にはまだ影は射ってきてはいないが、いずれ射し込むことが暗示されている。Joshua と Cornelius に取り付いた‘a spirit in kerseymere’は、やがて彼ら自身のみならず Rosa と Fellmer 家をも破滅させてしまうかもしれない。即ち作品が終わる所から兄弟の conflict が始まるのであって、彼らは心の‘darkling plain’に投げ出され、行き暮れている。そしてタイトルの‘A Tragedy’はこれから起こり得る壮大な悲劇を暗示している。

全体的に見て、朝は夜の出来事が発覚する、或いは現実社会に於いて、法律・社会道徳・宗教倫理に照らし合わせて如何なる意味を持つのが明確化する時なのである。それら現実的基準によって夜の出来事が全て機械的に裁かれていないことは既に見てきた通りである。sheep-stealer はうまく逃げ遂せている、というよりは住民感情が彼を逃がしている。Hardy が自身を meliorist と称する所以をここに垣間見ることができよう。彼は改善すべき点を暗示しながら、現実を独特のスタイルでありのままに描いた。それ故、Tess を如何にも社会と環境の犠牲者のごとく描きながら、彼女の死後、何一つ変化するものはない。このことは本論で取り上げた作品全てについて言えることである。そして朝は全てを明確にするかもしれないが、人々の心までも明るくするわけではない。Clym と同様、Angel もまた重荷を背負って行かなければならない。そして Bill Mills, the sheep-stealer, Rhoda Brook, Farmer Lodge も然り。Joshua と Cornelius は言うまでもない。彼らの心は次の詩が適確に表している。

Wintertime nighs;
But my bereavement-pain
It cannot bring again:
Twice no one dies.

冬の時が近づく
でもそれも私の別離の痛みを
二度ともたらずはずはない
誰も二度とは死ぬことはないから

中 略

Leaves freeze to dun;
But friends can not turn cold
This season as of old
For him with none.

木の葉は凍り黒ずんでいる
でも友も冷たくなるはずはない
この季節は昔のように
彼には友がいないのだから

Tempests may scath;
But love can not make smart
Again this year his heart
Who no heart hath.

嵐が痛めつけるかもしれぬ
でも愛はまたこの年に
彼の心を痛めるはずはない
彼には愛情などないのだから

Black is night's cope;
But death will not appal
One who, past doubtings all,
Waits in unhope.³⁴⁾

夜の帳は黒い
でもあらゆる疑念を越えて
希望もなく待つだけの人間を
死は脅かすことはないであろう

Clym や Angel, そしてその他の人達の心は、夜が明けて全てが明白になっても闇から解放されていない。彼らの前には茫漠たる 'darkling plain' が広がっている。たとえ処罰を免れようと、生き残った者達の罪は消えてはおらず、社会制度、宗教教義も変化していない。これこそ後の D.H. Lawrence 等, naturarists へ通じるものであり, pessimistic な色彩を生むものである。

しかしながら生き残った者達の暗く重い心の荒野に、人間としての生の本能—これは時には 'the appetite for joy' となる—が仄めかされる。それは Thomasin と Venn の結婚, Rosa と Fellmer 氏との結婚, 等に見られる。だがそればかりではない。前述の人生に於ける死を一度体験した人々の中にもそれが見られる場合がある。Clym は 'an itinerant preacher' (巡回説教師) の使命を果たそうとして Thomasin に結婚を申し込もうとするのであり, Milton の *Paradise Lost* の最後を想わせる Angel と 'Liza-Lu' の姿にさえ, Adam と Eve が相携えて安住の地を求めて行く様子が重なる。そしてあのしたたかな sheep-stealer は言うまでもない。彼らは 'Who holds that if way to the Better there be, it exacts a full look at the Worst,....'³⁵⁾ と言えるだろう。

注

1) 本稿は「日本ハーディ協会会報 No.19」に掲載された論文に続くものである。

2) Thomas Hardy, intro. by Derwent May, *The Return of the Native* (The New Wessex Edition;

- Macmillan, 1974), pp. 33–34.
- 3) *Ibid.*, p. 34.
 - 4) *Ibid.*, p. 93.
 - 5) *Ibid.*, p. 202.
 - 6) *Ibid.*, p. 45.
 - 7) *Ibid.*, p. 45.
 - 8) *Ibid.*, p. 94.
 - 9) *Ibid.*, p. 93.
 - 10) *Ibid.*, p. 35.
 - 11) John Alcorn, *The Nature Novel from Hardy to Lawrence* (Macmillan, 1980), p. 3.
 - 12) ここまでの理論の詳細は「日本ハーディ協会会報 No19」掲載の論文を参照のこと。
 - 13) Thomas Hardy, intro. by James Gibson, *Tess of the d'Urbervilles* (The New Wessex Edition; Macmillan, 1974), p. 108.
 - 14) *Ibid.*, p. 315.
 - 15) *Ibid.*, p. 369.
 - 16) *Ibid.*, p. 132.
 - 17) *Ibid.*, p. 110.
 - 18) *Ibid.*, p. 337.
 - 19) *Ibid.*, p. 161.
 - 20) *Ibid.*, p. 348.
 - 21) *The Return of the Native*, p. 34.
 - 22) Thomas Hardy, *What the Shepherd Saw in Life's Little Ironies and A Changed Man*, ed. by F.B. Pinion (The New Wessex Edition; Macmillan, 1977), p. 341.
 - 23) Thomas Hardy, *A Tragedy of Two Ambitions in Life's Little Ironies and A Changed Man*, ed., by F.B. Pinion (The New Wessex Edition; Macmillan, 1977), p. 79.
 - 24) Kristin Brady, *The Short Stories of Thomas Hardy* (Macmillan, 1982), pp. 117–118.
 - 25) *A Tragedy of Two Ambitions*, p. 83.
 - 26) *The Short Stories of Thomas Hardy*, p. 118.
 - 27) *Ibid.*, p. 23.
 - 28) John Bayley, *The Short Story* (The Harvester Press, 1988), p. 135.
 - 29) Thomas Hardy, *The Withered Arm in Wessex Tales and A Group of Noble Dames*, ed., by F. B. Pinion (The New Wessex Edition; Macmillan, 1977), p. 64.
 - 30) *Ibid.*, p. 81.
 - 31) Thomas Hardy, *The Tree Strangers in Wessex Tales and A Group of Noble Dames*, ed., by F. B. Pinion (The New Wessex Edition; Macmillan, 1977), p. 32.
 - 32) *The Return of the Native*, p. 394.
 - 33) *Ibid.*, p. 394.
 - 34) Thomas Hardy, “In Tenebris I” in *The Past and the Present*, in *The Complete Poems of Thomas Hardy*, ed., by James Gibson (Macmillan, 1976), p. 167.
日本語訳は吉川道夫著『言語的テクスチャーから見たトマス・ハーディの詩』(篠崎書林, 1991)による。
 - 35) Thomas Hardy, “In Tenebris II” in *The Past and the Present*, p. 168.

(1993.6.4受理)